

ハードルを
越えて

給餌機壊し責任痛感

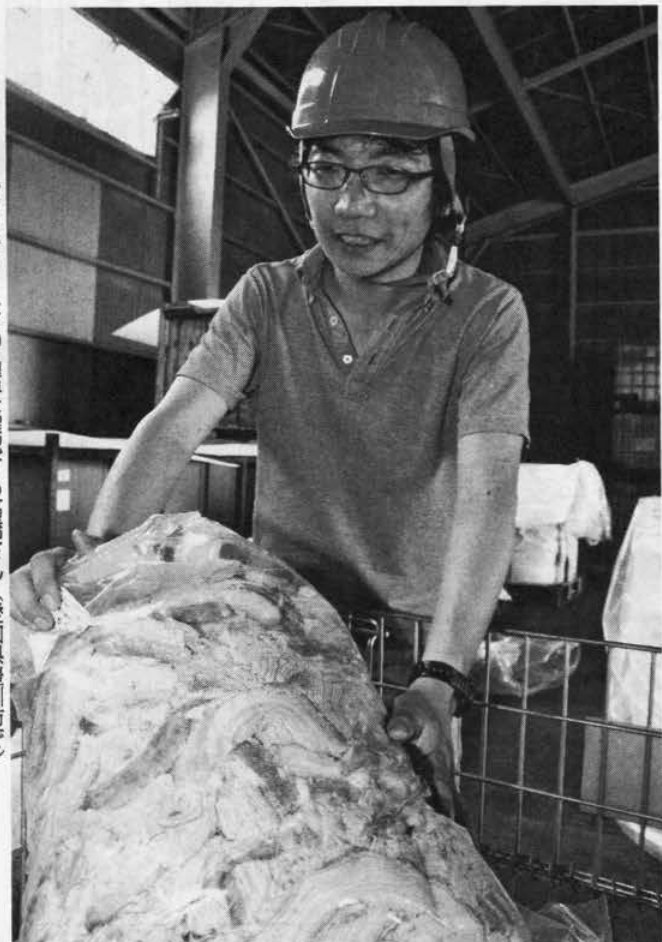
■ 食品残渣の家畜飼料を全国展開

当と試行錯誤を重ねて開発、リサイクル飼料に畜産の未来を感じた。

「給餌機のポンプが、詰まって壊れた。どうなってるん

だ」リサイクル飼料の事業が軌道に乗り始めた12年。JAから、養豚農家に供給している飼料に入れていたナツメヤシの種がポンプに詰まり、壊れたという一報が入った。硬く、粉砕しきれなかったのが原因だ。ポンプの価格は120万円。自動給餌機は3日間、使えなくなった。

高橋さんは損害や復旧に掛かる費用を全額負担。「家畜の命を支えるには、今まで以



バウムクーヘンの品質を確認する高橋さん（愛知県豊川市で）

ゼロから学び食農つなぐ

上に細心の配慮が必要と身に染みた」と振り返る。

当時、JAの畜産課にいた三石達夫さん（53）は、実証事業から高橋さんと苦勞を重ね、最適なリサイクル飼料の原料を模索してきた。

三石さんは「農家の機械を壊してしまったことで、そこで取引が終わってもおかしくなかつた。だが、高橋さんの『まだ食べられる資源を活用したい』という強い理念を信じたかった」と明かす。

高橋さんは会社勤めを経て05年、まず始めたのが食品工場の排水汚泥を堆肥化する事業だった。だが、養豚農家から「食品工場から餌の原料を入手できないか」と提案され、リサイクル飼料の事業に参入。08年の飼料高騰の中、JAと行政、大学などが始めたりサイクル飼料の実証事業で、高橋さんはゼロから技術を学んだ。

忘れられないのは参入前の07年、食品工場で見た光景だ。インスタントスープ工場

では、製品の種類を替えるたびに残ったスープ粉末を掃除し、全量焼却していた。即席ラーメンの工場も、わずかに欠けたものを処分していた。餌の原料を大量に仕入れるにはどうしたらいいか。目を付けたのは腐敗しやすく、リサイクルが難しい原料だった。

例えば、バウムクーヘン。25%の水分を15%以下に落とせばかびが生えにくくなる。とが判明、乾燥機を自作した。腐敗が心配なゆで大豆は、品質低下を防ぐ調整剤としてギ酸をかける。と長持ちした。ギ酸は飼料安全法で認められている。食品工場で一次処理してもらい、畜産農家に運べば利益が出ると踏んだ。

こうして、材料ごとに保存・運搬方法を検討。全国6カ所の食品工場と近隣の畜産農家を飼料で結ぶネットワークを築いた。今後は「リサイクル飼料だからこそできる、おいしい肉や乳製品を作りたい」と高橋さん。もったいないの可能性を信じている。（立石肇彦）

インターネットで「リサイクル飼料」と検索すると上位表示される飼環境テクシ。その社長を務めるのが愛知県豊川市の高橋慶さん（41）だ。食品加工で生じた渣（さんさ）から年間600トの家畜の餌を製造・販売し、いまや全国に顧客を抱えるが、参入した2008年で畜産の知識はゼロだった。根底にあるのは、まだ食われるのに大量に廃棄される美態を変えたいという気持だ。JAひまわりの畜産担

たかはし けい
高橋慶さん（41）

愛知県豊川市